

序 文

このハンドブックは進化経済学をこれから学ぼうとされている方にはもちろんのこと、専門とされている方にも reference book として使ってもらえるようにした。現在主流の新古典派の経済学に疑問をもっている方にも興味深く読んでもらえるであろう。経済学としては新しい学問の方向が示されているからである。

Part1「概説／学説／関連理論」では、進化経済学の現状を概観してもらえらる。まず、大きな枠組みを「概説」として示し、次に現在にいたる思想・学説の主なものをまとめた。さらに今後の研究においておそらく関連するであろう諸分野・諸理論を網羅した。

Part2「事例」には進化の事例を 63 項目集めた。本書の最も特色ある部分である。今回収録した事例からだけでも、注目すべき進化の事例が多数あることを知ってもらえるに違いない。専門家の方にも、そうでない方にも、興味深く読んでもらえるであろう。

Part3「用語／人名」には、進化経済学に関連するさまざまな用語を解説し、進化経済学に関係の深い学者を紹介した。ただ、既存の経済学辞典・経済用語辞典を引けばすぐに見つかるような項目は省かれている。

「概説」は、進化経済学はこうあるべきだとか、これ以外の枠組みは認めないという主張のものではない。進化経済学は「進化という視点で経済を見る」という大枠では一致していても、具体的にそれをどう展開するか、独立した学問として全体像をどう構成するかについて、統一的な見解があるわけではない。進化経済学という学問全体としてそうであるだけでなく、編集主体である進化経済学会の内部でもそうである。

進化という視点に立つ以上、学問自体にも進化という方法を認めなければならない。進化経済学に多くの構想があることを認めたくうえて、それらが競合しあう中で、自ずと優れた枠組みが選り出されていくことを期待している。概説は、そのような一つを提示するにすぎない。ただ、これまで進化経済学の全体像といえるようなものはあまり提示されてこなかった。ハンドブックを編集する以上、一つのサンプルを提示する必要がある。読者には多くの前提なしに全体像をつかんでもらうことも必要もある。そう考えて全体の枠が

構想された。「進化」という概念をどう定義するかなどについては、編集委員会のなかで長い検討を行ったが、全体のまとめりはアンカーである執筆者に任されている。これも、多くの可能性の一つを提示するという立場から取られた方針である。

「事例」はけっして網羅的なものではない。なかには経済と直接関係のないものも含まれているが、これは社会における進化の事例としてむしろわかりやすいものとの判断による。経済の諸カテゴリーのそれぞれに興味深い事例が得られた。

それぞれの場面で適切な事例を引用することは、進化経済学という学問を魅力あるものにするためにも、それに説得力を与えるうえでも大切なことである。しかし、専門の研究者であっても、個人で多くの事例を調べること・知ることはむずかしい。研究者たちの共同作業として、多くのよい事例を集めることは、この学問の厚みを増すことになる。これは学会の事業としてはじめて可能なことである。このような試みは日本はもとより外国にも先例がない。

進化経済学は、歴史は長いがまだ新しい学問である。標準的な教科書が書かれ、初学者はそれを学べばよいというところまで到達していない。これは、しかし、この学問が遅れていることを示すばかりではない。いま、まさに興りつつある学問であるならば、これは当然の状況ともいえる。本書に示されているのは、いわば進化経済学に関する一冊の地図帳である。どの方面に探険に出かけるかは、読者自身が考えてほしい。

本書から進化経済学の魅力と可能性に気づき、この学問を研究しようとされる若い研究者が現れるとしたら、編集に携わった者としてもっとも大きな喜びとなる。

ハンドブックの構想は、出口弘会員と共立出版・石井徹也氏との立ち話から始まった。2003年11月の理事会で学会事業として取り組むことが正式に承認され、同年12月4日に第1回編集会議が開かれている。編集委員会は、経費の都合上、主として大阪と福岡で開かれた。編集委員と執筆者が西日本に集中しているのはその事情による。編集委員・校閲者・執筆者・編集者など多数の方々の協力によって本書は完成した。執筆者には進化経済学会会員でない何人かの方にも協力いただいている。学会および編集委員会として特に感謝したい。

日本の進化経済学会が設立されて10年が経った。このハンドブックが進化経済学と学問の一里程碑として、今後の進化経済学の発展に寄与できれば幸いである。

2006年9月

編集委員会を代表して 塩沢由典